

雑感、バレーボールの指導と想い

川合 武司*

バレーボールを愛する皆さんと共に、バレーボールを語り、共に研鑽を積んできた約50年の歳月はまさしく充実の半世紀でありました。この間、懸命の頑張りにも拘らず、大切なゲームではいつも敗戦の結果しかえられなかった、若い日の苦い思い出、充実の40歳代の時には、毎試合願いが叶い、常勝の軍団をひきいていたころの歓喜の思い出、50代後半からの、大学女子バレーボール部13部リーグ新加盟から、1部リーグ昇格への道筋等、実に沢山の思い出を作ってくれた、このバレーボール界には感謝することのみ多きことでもあります。思い起こせば、一流への道を目指しながらも、敗戦による痛手で、夢と希望を失い、打ちひしがれていたころは心身ともに病的状態で、免疫力の低下により、消化器系の疾患に悩まされていました。常勝の頃は「お山の大将我一人」の心境で、今にして思えば、恥かしいほどの自意識過剰状態でありました。人生その様な時もあるのです。しかし、自分自身はその時の自分に気がついていないことで、多分、自惚れの真只中に有ったのではないかと思います。暫く休養の後、大学女子バレーボール界に足を踏み入れ、再び現場に戻ったのであります。私自身、指導者としての体力は相当に衰えており、創意工夫が必要な状態でした。練習は短時間集中型とし、約2時間という限度を設定した中で行いました。また、当たり前のことではありますが、暴力行為の完全否定も看板に掲げました。その結果、クラブの雰囲気は相応に良く、成果が上がりました。立ち上げ時の大目標は「文武両道と人格の陶冶」とし、当面の目標にインカレ優勝と1部リーグ昇格としました。現在の心境では、目標の80%が達成できたと思っております。

西洋文化における偉大な足跡を残した倫理学者、アリストテレスはニコマコス倫理学の中で「知性は教育、性格は訓練」によると説明しました。この事は多くの生徒や学生を指導した経験からみても、現代の指導方法にも適応できる倫理観で素晴らしい一言に触れた感激は忘れ得ぬものでした。また、この中で、研究の事にも触れておられ、完全無欠の結果を求める学問は数学のみとし、他の学問はある部分の例外が認められる範囲の中で結果が求められることとしております。バレーボールを題材とした研究活動を行っている学会の成果は多岐に分かれ、自然科学的なもの、社会科学的なもの等が中心的課題として、発表されております。しかし、両様がミックスされた人間学的研究成果の発表方法を創意工夫し、真に現場指導の役に立つ理論が誕

生するならば、学会の存在価値が増大するものとおもいます。学会員の皆様へのメッセージはこの辺で終わり、スポーツ指導へのこだわりや、考え方等について述べたいと思います。

球技系スポーツの効果的スポーツ指導を行うためには自然科学的思考と社会科学的思想とが相互に関連し合い人間学的思考が大切に思います。なぜなら、機械やロボットがスポーツをするのではなく、複雑な思考能力を持ち繊細な神経支配をされた人間が行うものであるからである。また、いろいろなホルモンやサイトカインが人の気持ちや感情の変化などにも微妙な影響を与え、その時々により異なる身体の変化が起こっているからである。

効果的指導を的確に行うためには、多くの知識や指導経験を基にした眼力による観察に始まり、的確な指導計画と運動処方、科学的、合理的、経済的な技術・戦術指導が大切に思われる。そして、忘れてならぬもの、ものとして見えない心や社会環境にも配慮する中で、実は厳しく激しく鍛えねばならないのである。あと一つ忘れないでほしいもの、それは健全な精神と健全な身体を鍛えるスポーツであってほしいと願う。お金も勝利もほしいと思う。しかし、あまりに強いこの誘惑に指導者が負けないでもらいたい。私の大好きな言葉のひとつに「勝つとは己に克つ事である、相手を倒すことに非」学問とスポーツを両立する文武両道の精神で日ごろの鍛錬に励み、高い教養と崇高な倫理観を兼ね備えたスポーツマンの育成に努力してほしい。

以上、自分には出来なかったことが多いスポーツ指導精神であったが願望を含めて書き記すものである。現場での実質的指導者を卒業するに当たり、私の愛読書、「星の王子様」の生き様や考え方等とスポーツ指導とのことについて述べたいとおもいます。

著者は私人作家「サンテ グジュベリ」です。彼の生涯については沢山の研究者らが、独特の史実に基づいて発表しており、諸説入り混じった状況のようです。1944年の出来事で、飛行機乗りの彼は取材の為にパリの空港を大西洋上に向かって飛び立ち、何処かわからぬ場所に墜落し、行方不明になりました。墜落場所は大西洋上であることだけが分かっていたが詳しい場所について不明であった様です。数年前のことになります、さる新聞のコラム欄を読んでいたところ、彼の墜落場所が偶然分かったと書いてありました。ある漁師が大西洋上で魚網を降ろし、漁をしていた時の事です。引き上げられた魚網の中に「ピカッ」と光る腕輪があったとの事です。この腕輪には彼と奥様の刻印があり、サンテ グジュベリの墜落場所が分かったと

*本学会副会長・日本成人保健医療問題研究所

ありました。広い大西洋上で偶然にも見つかった出来事が素晴らしい発見であったとありました。私自身もこの偶然に驚き、目を見張る状態であった事が思い出されます。そして、再度この書物を取り出し読み返しました。フランス語の分からぬ私の事ですから、読んだものは訳本です。何回も読み返す度に新しい発見があり興味は尽きません。これより尽きぬ興味がスポーツ指導とどの様に関わり合っているのかについて、私の独断と偏見であります。論述したいと思えます。文学には極めて弱い私が述べる事ですから、解釈上間違いがあるかもしれません。その点に関してはお許し願いたいと思えます。

この童話は一輪の薔薇(恋人)を愛するラブストーリーである事。また、人間の生き方に対して、生き様の方向性を考えさせる本であります。スポーツ指導法に対しては直接的な表現で書かれている本ではないが、重要なヒントをくれた名著であると思えます。そして、生き様の中で「最も大切なものは目に見えないもの」と教えてくれた本がありました。指導に関しては、指導上「目に見えない部分」を大切に指導しなさいとの教示であったようにも思われます。

サンテ・グジュベリは星の王子様を貧しく苦勞多き生活をしている友人、レオン・ウェルトに捧げると献辞に書いています。この献辞の一節に、この友人は子供のことを良く理解してくれる人であるから、もっと強く言えば、昔、一度は子供だったのだからとしています。そして、このあとに有名な一説「おとなは、だれも、はじめは子供だった。(しかし、そのことを忘れずにいるおとなは、いくらもない。)と述べています。

私どもバレーボールを愛好し、指導するものにとって、吟味したい大切なヒントと思えます。確かに、私自身が初めてバレーボールに手を触れた瞬間の事や、最初に受けた指導の事などは良く覚えていません。しかし、最初に指導してくれた人は、確かに、私を「バレーボール大好き人間」にしてくれました。その一部始終を記録に残し、覚えていたならば、私は現在より、もっと高いレベルの指導者になっていた可能性があります。約50年前の事なので、思い出せないのが残念です。

この本は、サンテ・グジュベリが小さな夢を持ちながら育ち、成長して飛行機乗りになるまでに出会った、子供時代の思い出、星の王子様が出合った大人の人の不思議さ、そして、星めぐりの旅物語から、生まれ故郷である小さな星にいる一輪の「薔薇の花」のもとへ帰って行く、高尚で面白いラブストーリーです。

絵描きになりたいと言って、彼は象を呑み込んだ「うわばみ」の絵を描いて大人に見せたところ、殆どの大人は「帽子の絵を描いてどうするの」と言い、描いた絵を理解してくれません。と同時に、この様なものを描いていないで、「地理や歴史と算数と文法に精を出しなさい」と言いました。子供の心を理解しない大人に、彼はがっかりして

しまうのです。

多くのバレーボーラーは学校教育を通してバレーボール文化を知り、実際のゲームを観戦し、仲間のお話を聞いて育っているのです。初めて参加した時に、パス・トス・スパイク・サーブ等が、早く上手になって、楽しくゲームに参加して、豊かで実り多い生活を夢見ているのです。その時に、指導者が技術や戦術の知的財産をあたえず、ボール拾いや、性格作りの訓練ばかりに精を出したとすれば、一瞬にして、夢が破れ「バレーボール嫌い」となり、辞めてしまうと思えます。相手の気持ちを理解できない指導者では、文化の継承者になり得ず、自分勝手に我がまま指導が文化を衰退させる原因と思えます。指導者は自分が始めて参加した時の気持ちを思い出し、参加してくる子供たちの夢や希望を最大限叶えてあげて下さい。この事は上級・中級・初級指導者共に、大切にして欲しいところです。

この作者と王子様との出会いは、作者の飛行機が砂漠に不時着し、修理中の時です。疲れて、ぐっすり寝た次の日の早朝の事です。王子様が降って湧いた如く、「羊の絵を描いて」と作者の前に現れたのです。実はここから、読みようによっては有意義で面白い話が展開されていくのです。例えば、大人って、どうして数字にこだわり、好きなんだらう、とか、何でお酒を飲むのだらう等の話し、また、砂漠で出会った一本の木が語る、「人間には根がないの」との事。また、ヘビやキツネとの対話などの中に、指導者にとって有意義で、考え方の指針になり得るものが沢山あります。最後の地球との別れに際して、キツネが王子さまに向かって言いました。「最も大切なもの」それは目に見えないのです。何万本の薔薇、その一輪一輪は確かに美しい。しかし、私の生まれ育った星にある一輪の薔薇は、地球上にある、何万本の薔薇と同じ様に見えるが、私が風に舞って飛んできた種から、愛情を込めて育てた薔薇とは違う。と言いながら、彼は恋人である薔薇の下へ帰っていく、暖かい童話でした。

確かに、バレーボールの指導に際して、我々は、この眼に見えない大切なものを見落として、指導をしているのではないか。と言う事に、気をつけたいと思えます。そして、クラブ運営や実技指導において、細心の注意を払う必要があります。勝つ事や負ける事に慣れると、人は大切な事を見落として、惰性に流される事があり、いろいろと注意が必要と思えます。以上、内容の一部を表現させていただきました。思い起こせば、いろいろな事柄が走馬灯のように、身体中を駆けめぐります。

以上、「星の王子様」とスポーツとの関連について、述べてみました。これはつたない私の思い入れの一説です。なお、この本の中には、その他、沢山の素晴らしいこと、また、指導上、役に立つ事がたくさん書かれています。この一文を読んで、興味をお持ちになられた方には、熟読してみる事を勧めます。